

# 出雲街道根雨宿の 繁栄を伝える

# 祇園橋



祇園橋は、須佐之男命を祭り「祇園さん」の愛称で親しまれ、板井原川に架かる鉄筋コンクリート橋です。また、鎌倉時代に長谷部信連公が京風文化を模して造ったとも伝えられています。根雨神社の参道でもある祇園橋が架かる板井原川は、根雨名物の鯉が生息し、出雲街道の宿場町としての賑わいを一層深めています。

現在のコンクリート橋に架設される以前は木橋だったため、朽ちて両方の高欄が落ち、人々の行きかきもなく、腐朽祇園橋とさえ言われたほどでした。このため、町をあげての架橋運動のおかげで、昭和7年(1932)11月に工事着手が決定されました。

設計にあたっては、根雨神社前であることから歴史もふまえてふさわしいデザインが求められた結果、京都府の五条大橋を模して情緒溢れる橋で、かつ「堅牢に」という合言葉の下に、設計・工事が進められました。

兩岸四隅の親柱には花崗岩の石燈籠を、また高欄には擬宝珠が取り付けられてあり、石積みの護岸とともに背景の根雨神社と調和がとれています。

工事にあたっては、米子市の業者が請負い、昭和7年11月4日に起工し使用人員は延べ5,338人と工費14,800円を費やして、鉄筋コンクリート造(橋長36.6m、幅員5.5m)の桁橋が完成しました。竣工式は工事開始から半年後の昭和8年4月29日に行われ、待ち望んだ町内では花火を打ち上げるとともに、各戸に町旗を立て、商店も競って装飾しました。また、この日のために米子市から臨時のカフェまでできたということです。

祇園橋の完成から一世紀近くを重ねる今日ですが、現在でも建設当初の姿をほぼ残している祇園橋は根雨神社とともに町並みに落ち着きを醸し出しています。現在は明かりこそ灯されていませんが、竣工当時には照明が取り付けられてあった石燈籠は夜になるとほんのり灯り、その風情は何とも言い難く、旅情をかきたてていました。



板井原川に架かる祇園橋  
(橋長36.6m、幅員5.5m、鉄筋コンクリート造・T型3連続桁橋)

## ■位置図



常夜燈と祇園橋の親柱  
板井原川をはさみ、社叢に包まれた根雨神社を望む



根雨神社  
往古、出雲國須賀の宮より勧請し、須賀の宮と称して崇敬された。中世に京都の祇園社(八坂神社)を勧請し、明治初年に根雨神社と改称した



たたら製鉄により繁栄した「根雨」は宿場町の町並みを残す